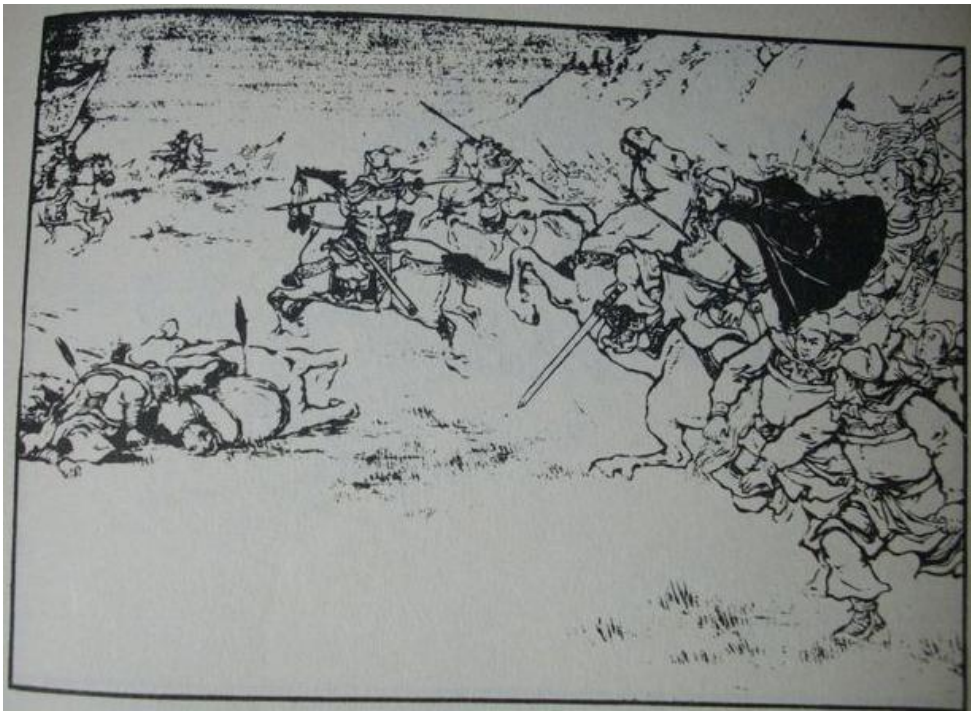
「三国志の巷の見解に対する反駁論」

近年も三国志コンテンツは盛況でありますが、まともな歴史解釈に基づかないもの多く、それらの印象で『三国志』が歪められるのを残念に思い、筆者が目にした「これはどうか？」という見解や解釈に反論した書に、さらに反論以外の題目も追加した書です。
内容は中級者向けです。

浅学な者ゆえ、もし引用間違いや初歩的な誤りがございました際には、御指摘くだされば幸いです。



一　蜀びいきの原点

　歴史書『三国志』より小説『三国演義』のほうが有名になってしまったので、劉備・蜀＝主人公・正統という「演義的史観」を持つ人が多いという現状なのだが、その素養は古くから在ったという見解。

陳寿が蜀出身

　陳寿はもともと蜀漢（季漢）の役人で、その後蜀の地を征服した晋に仕えた。
三国時代の歴史書の編纂を命じられるにあたり、『漢書』の『項籍伝』『王莽伝』のように、蜀漢の扱いを正統である『魏書』の付属とし、呉の扱いを『晋書』の付属にする構成もできたはずだが、三国別々の構成にした。
劉備の項目は『先主伝』、孫権の項目は『呉主伝』とは名づけられているが、文章の構成は『帝紀』と変わらず、魏と対等に扱った感がある。また、薄っぺらい蜀書の最後を『季漢輔臣賛』が飾るという構成に加え、劉備の名前を諱と記して皇帝扱いしたりと、故国への待遇に特別なものを感じる。
『三国志』三書各伝の中で一巻に表題が一人なのは『諸葛亮伝』と『陸遜伝』のみで、陸遜伝は息子の陸抗と半々くらいの記述に対し、諸葛亮伝は大半くらいが諸葛亮の記述で占められている。

陳寿にとって、劉備は祖国の創建者、諸葛亮は祖国の英雄だったのではなかろうか。

漢晋春秋

習鑿歯は蜀臣の末裔にあたり、東晋後期の権力者・桓温の簒奪を諫めるため、後漢～西晋の歴史書を著述した。題名の通り魏が抜けており、後漢→蜀漢→西晋という流れで正統性を主張したらしい。現存しないが、『三国志』斐松之の注釈に幾つか引用されている。本文より信憑性が劣るものとして読むのが妥当であろう。

李衛公問対

唐末～北宋初に著されたと推定される兵法書。曹操を批判し諸葛亮を賞賛している項目がある。

十八史略

元の時代の著作で、『史記』～『宋鑑』までの歴史書をダイジェストした書物であるが、明の時代に、朱子学の影響で正統を魏から蜀漢に変えられる。
筆者は少し読んだことがあるが、間違いが見られた（翻訳ミスの可能性もあるが）ので、読むにはお薦めしない。

二　徐州侵攻に対する批判についての反論

　当時の宗教観が全く念頭にない批評が多い。漢の武帝以来、新、後漢と儒教は国教的存在になり、深く社会に浸透しており、曹操も儒教的な言動をしている時がある。

儒教で最も重要なのは「孝」である。父を騙し討ちされた曹操が仇を討つのは当然の行為なのだろう。

曹操に対して厳しい『後漢書』でさえ、殺戮の責任は陶謙にあると記している。

三　官渡の役批判についての反論

官渡の戦いにおいて、斐松之は曹操軍の兵数（数千）が少なすぎると批判しているが、
まず曹軍は兵糧が少ない。十万の大軍を擁していても兵糧が少なければ少数しか遠征させることはできない。「三日で五百里」と謳われた夏侯淵に食料調達を仕切らせたのもその厳しい情勢を裏付けるものでは？

次に、曹操の勢力は屯田を敷いていた。魏の屯田制がどのように行われていたか詳細は分からないが、何ヶ月も駐屯地をがら空きにはできないはずで、三十万の青州兵を擁していても、遠征に動員できる者は三～十万だとしてもおかしいとは思えない。

また、曹軍は青州に侵攻した臧覇の部隊があり、司隷には鐘繇が居り、占領したばかりの徐州にも守備兵を残すはずであり、揚州の孫策にも備えていた事を想定すれば、各地に兵が分散していて、汝南郡に兵を遣っていた状況と考えれば、官渡の軍が一万弱であっても不思議ではない。

官渡の前に行われた延津の戦いでは、袁紹軍五～六千騎に対し、曹軍六百騎とあり、曹軍一万：袁軍十万の比率は合っている。

四　赤壁の役異論

　天下分け目の戦いと伝えられるが、実際の天下分け目は官渡の戦いであり、この戦いは孫権勢力の存亡を賭けた戦い、或いは初めて曹操と敵対した戦いと捉える方が合っている。
この戦いは各書によって記述が異なる。

『武帝紀』　曹操が劉備に赤壁で敗れる。孫権が合肥を攻め、張喜を派遣すると孫権は逃げる。
『先主伝』　赤壁で周瑜と（劉備が）力を合わせて曹操を破る。
『呉主伝』　孫権は合肥を、張昭は當塗を攻めるが陥れできず、荊州から戻った曹操が派遣した張喜が到着する前に孫権は撤退。周瑜と劉備が赤壁で曹操を大破する。曹操は船を焼いて撤退。軍勢の大半が飢えと疫病で死ぬ。
『周瑜伝』　疫病のためもあり初戦で曹操軍は敗退し北岸に陣を構える。黄蓋を投降させると偽らせ、船を曹操の艦隊に近づけてその船を燃やし、快速艇で脱出。曹操の軍の人馬の多数が焼死するか溺死し、曹操軍は江陵に退く。周瑜と劉備が曹操の軍を追撃する。
周瑜伝注釈の**『江表記』**　周瑜の推測する曹操の軍は十五、六万＋荊州の軍七、八万。周瑜は五万の精鋭を要求。
後漢書の『孝献帝紀』　曹操が烏林と赤壁で孫権の将周瑜と戦うが敗れる。

『資治通鑑』によると、曹操の軍に死者が多かった（大敗）というが、それは曹操軍の主力部隊か？　もし主力部隊ならば、なぜ死傷した将軍の名前が一人も出てこないのか？　　なぜ翌年も軍を動員する余裕があるのか？　優勢なはずの周瑜の軍が江陵を奪うのに一年以上も手こずったのか？

不可解な点は多いが、陳寿が三国志の『呉書』を編纂するにあたり、呉の史料を大量に引用したという説があり、周瑜の戦功が過大に伝えられていた可能性がある。特に『武帝紀』に赤壁の記述が少ないのは、曹操側にとって不名誉な出来事だったとみるのが妥当だろうか。その後、この地は忌避されたかのように、荊州方面から曹操が孫権を攻めることは二度と無かった。

五　荀彧の死についての反論

三国志の病死と異なり、後漢書では『魏氏春秋』の説を採って服毒自殺としているが、
これも儒教的観点が全く念頭にない批評が多い。三国志の注釈『荀彧別伝』によれば、荀彧は九徳を兼ね備えた人物と鍾繇は評価している。謙虚で、悪評のある人物でも頼まれれば会い、曹操に何度か要人の命乞いをした人格者である。

曹操も荀彧も最初は同じ価値観を持っていたと思う。しかし、許に遷都（西暦１９６年）して以来、荀彧は侍従長兼秘書室長として皇帝の傍に仕えていて、都を離れた記録が無い。十五年以上漢の朝廷に密着して、純粋に漢臣という意識が強くなってしまったのではないか。

その間、曹操は度々各地を遠征したので、荀彧と共に過ごす日々は減る一方、名声は高まり、新しい家臣が増える。曹操に皇帝に即いて欲しい者達が増えてくる。「漢のなんとかの将軍」と墓に書かれれば良い、という野心の無かった曹操も価値観が変わったのではないか。「吾は周の文王になろう」九錫を受けるくらい良いではないかと。

荀彧はこれに反対し曹操は不安になる。荀彧は名声・俸禄が曹操

に次ぐランクで、同郷の者を多く推薦し、関係の良かった同僚も多いはずだから、曹操の家臣の中から同調者が出てもおかしくないと思うのだが、一人も出なかった。

荀彧は孫権征伐に動員される。強敵・孫権攻略のための参謀としたかったのか、情報漏洩しにくい軍中で荀彧の本心を確かめたかったのか、説得したかったのか、曹操の本心は分からない。孔融の比ではない大物だから殺害は考えられにくい。

主君からも同僚からも理解されず、

十数年ぶりの派遣先が湿気の多い南の地、

敬愛する漢が滅びゆくのに耐えられず、憂悶のうちに病死したと受け取るのが自然な解釈ではなかろうか。言うなれば儒に殉じたと。

続きを閲覧されたい方は有料版をお求めください。
http://trinitavideo.web.fc2.com/catalog71.html

参考文献　　三國志（中華書局）
世界古典文学全集（筑摩書房）
後漢書（岩波書店）
正史（新漢籍電子文献資料庫）
晋書（解體晉書、漢々學々）
等
引用画像　　三国演義連環画（上海人民美術出版社）

２０１２年１月　初版制作
２０１３年８月　増補２版制作

筆者　伊藤道夫